

2026年2月22日（日）第二礼拝「苦難の目的」申命記8章11～18節

イスラエルの民が出エジプトした後、神様は四十年間、彼らに荒野で様々な苦難を通らせられました。その目的は、彼らを幸せにするためでした。神様は良き神様です。神様に意味のないものなどありません。神様は明確な目的を持ち、彼らに荒野を通らせられたのです。

第一番目、神様の御言葉を失い、神様を忘れることがないようにしなさい。神様を忘れるのは、人が食べて満ち足り、立派な家を建てて住み、所有物やお金が増える時、つまり、この世の幸せを味わう時です。その時、この富を築き上げたのは自分だと勘違いしてしまいます。ですから、そうならないように、神様は彼らを荒野で訓練されました。神様の民は、神様の御言葉によって生きる者です。神様の御言葉によって生きるなら、最も価値ある人生になります。荒野に入った一代目の民は荒野で死に絶え、その次の世代の者たちが約束の地に入りました。その彼らに「約束の地に入り、すべてに満ち足り、幸せになっても、神様の御言葉と恵みを忘れてはいけない」とモーセは伝えたのです。神様の瞳は、約束の地とそこに住む人々とどまっています。もし、約束の地に入った後に神様を忘れるなら、心は砂漠のように渴いてしまい、もはや、その地は約束の地ではなくなってしまうのです。約束の地で生きるとは、聖霊様が共におられ、義、喜び、平安で満たされ、天国が与えられるということです。私たちの本当の幸せは、神様を忘れず、神様の御言葉に生きることなのです。

第二番目、荒野の苦難の目的です。荒野はへりくだりを学び、神様だけに頼る者とされる所です。イスラエルの民は荒野で、神様が天から食べものを与えてくださらなければ、食べることができませんでした。昼は暑く、夜は寒い荒野の砂漠で、民は火の柱と雲の柱で守られ、神様が与えてくださるマナを食べて生きました。その中で自分の無力さを痛感し、主が共におられること、また、主に頼る以外にないということを彼らは体験したのです。荒野とは、毎日、御言葉を祈って生きる以外にない所です。それは「私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ」と言って高慢にならないためです。富を築き上げる力を与えられるのは、神様です。荒野の苦難によって、私たちはへりくだり、神様に頼る者とされるのです。

第三番目、栄光に通じます。イエス様も多くの苦難を通して従順を学ばれ、大勢の人たちを導かれました。同様に、私たちも苦難を通して忍耐と従順を学びます。その私たちの従順の中に主の臨在が溢れ、そこに人が引き寄せられ、救いが起こるのです。ユン大統領の子ども頃の夢は、牧師でした。彼は様々なところを通りながら大統領になりましたが、神様は彼に負い目を負わせ、投獄されました。しかし、彼は獄中で、子ども頃の夢を思い出し、聖書を読み、深く悔い改め、祈り続けました。その祈りで韓国の二十代、三十代の若者たちの目が開かれ、立ち上がったのです。彼らは日本の若者と共にイスラエルに福音を伝える者になると信じます。人は試練を通される時、金のように精錬され、信仰が深められます。食べ物に満ち足り、立派な家に住み、所有物や財産が増えたとしても、試練を通された人は、いつも心の中に主を据え、謙遜に生き、純金のような信仰を持ち続けることができるのです。